
今は亡きドワーフ村の思い出

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今は亡きドワーフ村の思い出

【Nコード】

N0752Z

【作者名】

たすく

【あらすじ】

死の女神シーレンの復活……崩壊した故郷……故郷へ帰ってきた一人のドワーフが昔を思い出す……

自サイトより転載。MMORPG「リネージュ2」を元に独自設定テンコ盛り注意。

第一話 帰郷

ここは異世界。エルモアデン大陸という巨大な大陸。

そのエルモア地方遙か北。四方に高い山脈に囲まれた外部から遮られていたスパイン鉱山地帯がある。

そこには『大地の種族』と呼ばれるドワーフ族がすむ村があった。常に『強い勢力に味方する』政策をとってきたドワーフは他の種族に嫌われているが、彼らの持つ組織力と経済力が巨大な力を持っていた。ヒューマンが支配した現在においても。

しかし、事態は一変したのだった。

シーレンの復活・・・

過去、ドワーフたちにより討伐され眠りについた『アースワーム・トラスケン』が復活する。シーレンの命を受けたトラスケンはドワーフ村を襲い壊滅されたのだった。

シーレン復活による疫病に打ち勝つことができたドワーフであったが、トラスケンにはかなわない。ドワーフの長老たちは村を捨てることを決める。

そして神聖な力によって保護を受けているといわれる『話せる人の島』へ出向き、再起をはかることになった。

ある日、ドワーフが一人、元ドワーフ村へ帰還した。長く旅へ出ていたのだが、ドワーフ村壊滅を聞き、戻ってきたのだった。

「なんてこと……」

建物は全壊状態。しかもトラスケンと戦ったであろう仲間たちの死体が点在している。

時々、トラスケンのいびきか寝返りか、ものすごい音を立てて地面が揺れる。

「墓も作れる状況じゃないんだね。ごめんね、みんな」

元村の中を歩きながら、そつつぶやき、まだ村にいたことを思い出したのだった。

…

…

…

…

…

わずかな平地で豪快な声が響いた。

「うおりやあああ!!」

ゴーレムが万歳をして倒れた。

「ハアハア… あー、痛かった…」

今、ホワイトストーンゴーレムを倒したのはドワーフ女性だ。

このドワーフ、他のドワーフと少し違っている。普通ならば鈍器や槍を持ち、狩りをおこなうが、このドワーフは両手に奇妙な形をした武器を装備していた。

たまたま、緑色の巨人（彼女は後で、炎の種族オークであることを

知った」が露店で売っていた武器。格闘武器と呼ばれるドワーフ村には売っていない武器であった。

「ふう、疲れた」

その場にぺたんと座る。

「さすがに痛いなー。でも、確実にダメージを与えられるからいいかな」

格闘武器は両手武器のため、盾を持つことが出来ない。相手が攻撃をミスをする以外、確実にダメージを負ってしまう。オークらしい武器ともいえる。

「相変わらず、殴ってるねー」

知り合いのドワーフがやってきた。こちらは槍を持っており、モンスターをかき集めては一気に倒すという、別の意味で豪快な狩りをするドワーフだった。

「まあね。で、今日はどうしたの？」

「んー。そろそろ、転職時期だと思って」

「転職？」

「うん。貴女もそろそろ、その時期じゃない？ どっちに進むの？」

「うーん???」

ドワーフは駆け出しのドワーヴンファイターから、収集系のスカベンジャーと製作系のアルティザンに転職が出来る。

「ま、時間はあるし。じっくり決めたほうが良いよ。後戻りは出来ないからね」

転職は一回きり。そのあとはさらなる上位職への転職以外ない。

「うん。で、キミはもうどっちに進むか決めたの？」

「アルティザンになるうかと思っっているよ。制作楽しいし」

「制作かぁ」

「うん。でも転職を指導してくれるドワーフって誰だか知らないから、今探してるの」

「とりあえず、旅に出られる年齢になったらそのまま追い出されるような感じだったしねえ」

「あはは…… それじゃまたね」
そう言つと彼女は道を走つていった。

座つたまま、彼女は考える。

（転職か……どっちにしようかな……）

（スポイルは楽しいし……クリエイトは……あ、ウッドンアローしか作つたことないや。）

（うーん。やっぱ、自分は製作系は向いてないのかな。）

（スポイル、やっぱ、面白いし。そっちに行くか。）

……意外と単純だった。

ドワーフ村の何処かにスカベンジャーになるための試練を与えてくれるドワーフがいるらしいという情報を得る。

（あの人しか居ないみたいね……）

コレクターピピ。噂ではスカベンジャーを極めるとなれると言うコレクター。真偽は定かではない。

（ま、ただの噂よね。）

「スカベンジャーになりたいですって!？」

ピピに聞くと驚かれた。しかも叫ばれるという。

「あの、そんなに叫ばなくても……」

「それはそれは感心な事なのです〜！ 貴女のように賢い方が少なくなつて、近頃では本当に珍しいのです」

「えと、私、賢くないし……」

「アルティザンになれば、一生人の下で死ぬほど働かされるんです。重い財布を拝む事は出来ませんよ」

（それはそのドワーフのやり方に問題があるんじゃない？ とりあえず、聞いている振りをして試練の情報を得ないと……）

アルティザンの悪口？や自慢話を散々言い続けるピピ。聞いている振りをしているとはいえ、聞いているのが辛くなってくる。

（まだかな〜）

終わらない。

（ねえ、もう、ゴールしてもいいよね？）

変な電波拾つたり。

（……………）

話し続ける事、数時間後……

「では、お話ししましょう」

（ふう、やっと本題だよ。自慢話は聞き飽きたよ。）

心なしかげっそりした表情。ご愁傷様〜という感じで避けて通行していく仲間たち。

それをしり目に気持ちを入れ替えたのだが…

「実は試練について何も知らないんです〜、てへっ」

ぶち。

キレた。

あれだけ自慢話を聞かされた拳句、知らぬとは。

彼女は、怖い笑顔を浮かべながら、両手に武器をセット。殴りかかろうと構えた。

「サア、シノウカ？」

「ちょ、ちょっと待ってください!!」
慌てるピピ。

「ナニカナ？」

「スカベンジャーは、マスタートーマだけが承認する事が出来るのです」

「マスタートーマ？」

初めて聞く名前だった。少なくともこの村にはいない。

「マスタートーマです」

名前の訂正をしてくるピピ。

「トーマの行方は彼の妹であるミオンが知っています。聞いてみて下さい。紹介状を渡しますから、おちついてくださあい」

「はあ。」

ため息をつくと武器を外す。多少顔色が変わっているピピから紹介状をもらう。

「それでは、頑張ってくださいね」

「次はないですからね」

「は、はい」

（しかし、疲れた…あーあ、日が暮れ始めてるよ…朝一で来たって言うのに…腹減ったな…）

第二話 怒りの鉄槌!?

「今日も元気だ、飯が美味い! ……………さてミオンに会いに行くか」
昨日の事もあり、朝一で行くことにした。ミオンは道具屋の店員なので、とりあえず道具屋へ向かった。

そして、道具屋につくと、ミオンにピピの紹介状を渡す。

ミオンは紹介状を読むと……

「兄を探すんですって!?!」

……と叫んだ。

(また、叫ぶし…… なんか嫌な予感しかしないんですけど……)

「でも、兄はあちこちを回っていて、探すのが大変ですわ」

(仕事か何かな? マスタートンマって名前だし……)

名前を間違えて覚えたらしい。

「少し前にテレポート装置だか何だかを作ったから一層探すのが難しくなっただんです」

(……遊び人か、浮浪者ですか?)

「兄を探しますから、その間、私のお仕事手伝ってください」

(手伝わないと教えてくれないんだね……)

しかたがなく、配達の手伝いを始めた。多少の不安はあったが、それを信じるしか今はない。

たまたま、配達先で大地の神官ジメンフのつぶやきを聞く。

(ミオンはまた、兄さんを餌に使い走りをさせてるな…… ひひひ……)

(鈍い奴……お前はミオンに騙されているんだ……)

(な・ん・で・す・と・!・!・? あのアマ……!……!)

配達する度に頭に血が上っていた彼女だったが、つぶやきを聞いて怒りが頂点に達した。

鈍足なドワーフとは思えない速度で道具屋へ走り出す。そして、道具屋につくと扉を壊さんばかりに開ける。

「キ・サ・マ」

「次はここへお願いします」

爆発寸前の彼女に対して、次の荷物配達先を指示するミオン。

「キサマシツテイタナ」

「どうしたんですか？　うちの店は迅速配達で有名なんですよ？

私の兄の事を探すことは心配しないでくださいね」

「断る」

「何を言っているんですか？」

「嫌」

ミオンの襟首を掴むと右腕を振り上げる。すでに格闘武器は装着済みだ。

「……知っていたんだろ……最初っから……！」

可愛い顔が鬼の形相に代わっている。

「ひい」

ミオンはそれを見て短い悲鳴を上げる。

「どこだ？」

「あ、兄は今回村野東の廃墟によって、ルシアンの実績を褒め称えにドワーフの王国の東の端に行くと言ったそうです。最後に北の海辺から広い海を見学すると言ったそうです。それ以上は知りません」

「本当か？」

「ほ、本当ですよ」

「そう……これ……は……お……れ……い……ね……！」

「へ？」

ミオンを殴り飛ばした。

「ギャパア！？！」

（何でこう、ムカつく奴ばかり……）

数時間後。

「うわぁ！」

道具屋に入ってきたドワーフが悲鳴を上げた。壁の一部になってしまった、ミオンを見たからだ。

「…………… ブツブツ…………… ヒイイ……………」

と、何か呟いていたという。

「さてと、トンマとやらを探さないと…あいつの兄だからムカつく奴なんだろうね。なんかもう疲れてきた。あの娘のアルティザンへの転職もこんなに大変なのかな？」

そう言いつつ、地図を広げる。

「えーと、廃墟って言ったから炭鉱かな？ 炭鉱に海岸に…東の端

か。はあ、全部探すしかないのか。とりあえず近い所から当たるか」

炭鉱。今は使われていないが、モンスターが住み着くようになってしまっている。

「さーで、トンマは何処じゃ」

取りつくし捨てられた炭鉱とはいえ、結構広く深い。モンスターの住処にもなっている場所である。

しかし、彼女の実力なら炭鉱内のモンスターは敵ではなく、襲い掛かってくる奴から殴り倒していった。

そして…

「むゝ。やっと、見つけた………… トンマ…………」

炭鉱の奥、螺旋状になった箇所がある。その最下層の広くなった場所に奴はいた。マスタートーマだ。

「あのゝ」

恐る恐る声をかけた。ミオンの兄であるので、何をしだすかわかったもんじゃないかった。

「お、どなた？」

（へ…？）

変な喋り方を気にしながらミオンの手紙を渡す。

「ミオンの手紙？ ふむ、スカベンジャーになりたいの？ じゃ、私が言うつおりクエストしなさい。」

（………… 気持ち悪い喋り方。ヒューマンにそいうのがいるって聞いたことがるけど、ドワーフにもいたんだね。オカマ？とかいうの。でも、やっと試練を受けられる。）

「最近、体が甘い物を要求するんだわ。どう思う？」

「……………」

「友達が言うには鉱山地帯のハンターベアーを捕まえると時々出てくるハニーベアーというヤツがいるんだけどほっぺが落ちるぐらい蜜を持っているって。そのハニーベアーをを殴り倒してスウィーパーでくなく探して蜂蜜の壺五個だけ持って来てよ」

ハンターベアーは鉱山地帯の西部にいる。何度も拳で語り合っているのでよく知っていた。結構強くてやばかったことも何度あった

相手である。

トーマはデイベアの図鑑を取り出して彼女に渡した。

「これは…？ クマの図鑑…？ ですか？」

「そうよ。これを持ってないと、いくらハンターベアーを倒してもハニーベアーは現れないわ」

「へ」

「それじゃ、よろしくね」

「はい」

（不安は多量にあるけど… ま、やってみますか。）

第三話 マスタートーマの依頼

彼女は鉾山地帯の西部にやってきた。

海に近く、少し開けた場所だ。目的のハンターベアーはこのあたりに生息している。

「そついえば、何体倒せば目的のハニーベアーが現れるか聞いてなかったな。ま、いいか」

武器を弓に持ち替え、遠距離からハンターベアーを狙い撃つ。当たればこっちに向かってくるので、接近するギリギリまで弓で攻撃する。そして、格闘武器の射程距離に入ったら持ち替えて殴る。ひたすらこれの繰り返しである。たまに休憩挟むが…

「はあはあ。まだ出んのか。結構倒したと思ったけど……」

休憩中につぶやくが出ないもんは出ないのである。

「……続けるか」

「うおりやあああ!!」

殴る。

「てやあああつ!!」

殴る。

「とりやあああつ!!」

殴る。

「ていやあああつ!!」

殴る。

「ちよんわああつ!!」

殴る。

ひたすら殴りあう。拳で語り合う。
「くっそー！」

今、一体のハンターベアーを殴り倒した。そのとき、魔方陣が現れた。

「へ？」

その魔方陣から毛色の違ったハンターベアーが現れた。

「派手な現れ方を…こいつが、ハニーベアーね」

ハニーベアーにスポイルをかけ、殴り倒す。あまり強くなかった。
「よ、弱い……　なんか拍子抜け……　おっと、スウィーパーしいと」

スウィーパーをかけると壺で得た。中に蜂蜜が入っているようだ。
「これかー。大体二十五匹ぐらいで出てくるんだね。それならよし。ガンガン殴りますか！　こうなったら滅ばしちゃう」

半分やけくそ気味であった。

「やっと五個そろった……さて炭鉱へ……って……はあ、そうか。
あのトンマ探さない」と

疲れきってその場にへたり込む。どうやら、必ずスウィーパーで得られるわけではなく、結果二百匹近いハンターベアーを倒していた。
「炭鉱と海岸と東の端だったかな…？」

地図を広げ、今いる位置を確認する。一番近いのはもちろん海岸。海沿いを走ってみることにした。

しばらく、走っていると海岸の岩山の上に人影を発見。マスタート
ーマだ。

（よかつた） 近くにいて、つとつと、こちら辺はなんか出鱈目に強いトカゲが何匹かいるから気を付けないと…）

出鱈目に強いトカゲこと、クルーデルリザードマン。今の自分が十人ぐらいいないと倒せないと思われる強敵だ。もちろん彼女は戦ったことはない。

その目を盗んでトーマのいる岩山へ近寄る。そして声をかけた。

「マスターンマ」

「ん？ 何かしら？」

「依頼の蜜持つてきました」

そう言つてそして壺を渡した。

マスターンマは受け取り確認するといきなり食べ始める。

「きゃーほんとにおいしい」

無我夢中になっていた。

「あ、あのー」

「あ、あら。ごめんなさいね。美味しくて夢中になっちゃったわ。で、次は怪物狩りだわ。タランチュラを捕まえて奴らが抱いている玉持つてきて。」

「玉？」

「そそ。ハンタータランチュラやプレデタータランチュラが持つてるわ。いっぱい、いっぱい持つて来て。少なくとも二十個はね」

「必ず得られるんですか？」

ハニーベアーの時には聞き忘れた事項だ。また、二百匹も倒している余裕はない。

「どうかしら？ あ、でもね。スウィーパー忘れないでね」

そう言つて、タランチュラの図鑑を貰う。

「わかりました」

「よろしくね」

（次の試練ね。転職の試練は一筋縄に行かないわ。でも、壺集めよりは楽かな…）

（さてと、狩りますか。）

海岸線にそって東へ、しばらく進むとハンターベアーの数が減っていき、タランチュラ類が増えていく。そして、ハンタータランチュラ、プレデータータランチュラがうようよいる地帯。

勝手に歩き回っているように見えるが、仲間意識が強い。一体が殴られているとすぐ集まってくる。彼女は、出来るだけ仲間から離れているタランチュラを探して狩ることにした。

「必ず得られるわけじゃないんだ……」

ハンターベアーと同じような狩り方でタランチュラを狩っている。すでに数十体のタランチュラを狩って、わずか数個しか得られていなかったのだ。

「これぞ、試練って感じよね。」

しばらくして……

「ハアハアハア…… 何十匹倒せば揃うのよ……」

目の前のプレデータータランチュラを一体殴り飛ばした。そしてビーズをスウィーパーで得る。

「よっしゃ！ 後一個おー！」

思わずガッツポーズをとる。

「で、次は…… あう…… 固まってる……」

見回すと結構近い場所に三匹ぐらい寄り合っていた。

そこで、弓で一匹を弱らせて殴り倒し、そのまま次を殴る方向へ進めることにした彼女。

ロングレードソウルショットを装填する。武器に装填することで一時的に破壊力を二倍にしてくれるアイテムである。ただし、一回で効果は切れる。連続装填は可能だ。

三対一の壮絶な戦いが始まった。

「オラオラオラオラオラー……！」

格闘武器には常にロングレードソウルショットを装填している。ハンターベアーをたくさん倒すことを想定して、大量に持ってきていた。

弓で弱らせていた一匹を倒した。スウィーパー。出ない。

「次っ！」

二匹目。こっちは最初から殴り合いである。そして、倒す。スウィーパー。出ない。

「出ない！ 次に期待して……ラストオ！」

三匹目。全力全壊で殴る。そして、倒す。スウィーパー。出た。やっと最後のビーズをスウィーパーで得ることができた。

「くは…… やつと二十個……… これをトンマに持って行けばいいのね。」

その場にへたり込む。流石に疲れ切った。

「でも、また探すのか…… トンマ……… 明日でいつか、もう……… 疲れたよ、私は………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0752z/>

今は亡きドワーフ村の思い出

2011年12月5日21時45分発行